

SF的読み解き

子どもという風景

## 第二十七回

堀内 守

## 時の流れ

### 溶解するもの

水を張った容器のなかに墨汁を数滴落とす。墨は水の面をゆっくりと広がっていき、さまざまな紋様を形づくる。

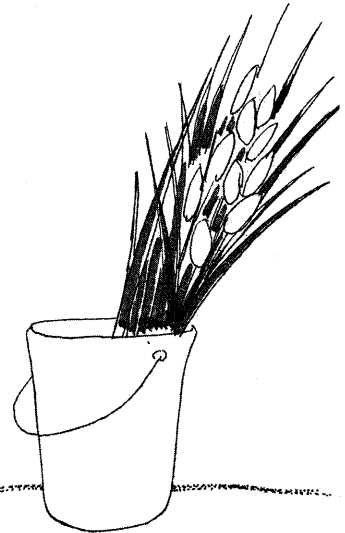
あるいは味噌汁。みの少ない味噌汁ならば、お椀に盛ると、噴煙の動きにも似た激しい動きを示す。熱い味噌汁の場合にかぎる。冷たい場合は、紋様はもつと緩慢にしか動かぬ。

動く紋様は人の関心をひきつける。どのように紋様が

変わっていくのか、待ち遠しくなる。なにげないことのように思えるが――。

哲学者の手にかかる時、こういうほほ笑ましい事柄が大問題に変わっていく。もちろん、「大問題」のなかには仰々し過ぎて、ついて行けないような問題もある。しかし、時には「なるほどな」と感心させられるようなこともある。

水を張ったコップのなかに砂糖を落とす。それが水に溶けて行くのを眺めたのはあのベルクソンである。どん



な砂糖だったか。どんなコップだったか。そんなことは第二次的なことだろう。それよりも、このような例をあげながら、時間の本質は「待ち遠しさ」にあると彼がのべていくことを重視したい。

「待ち遠しさ」は、ベルクソン哲学の用語では「持続」というように表現されているが、それよりも「待ち遠しさ」の方がわかりやすい。わくわく、どきどき。こういうときめきの方に目を向けよう。「持続」という術語になると、こういう身体のとときめきは拭い去られてしまうようである。

もうひとつ。コップのなかに砂糖を落とすという例にこだわってみたい。ベルクソンといえば、二十世紀の初めまでフランスの哲学界で人氣のあった人である。写真で見ると、端正な顔つきをしていて、いかにも学者然としている。

この学者が、コップのなかに砂糖を落として眺めるという例をひきながら時間について説いているのが面白いではないか。

眼前でそういう実験をやっているのではない。実験にはあのような「待ち遠しさ」はない。同じ「待ち遠しさ」でも実験の場合は冷静なものだろう。ところが、ベルクソンが挙げているのは、彼が子ども時代に経験したとおぼしきことなのである。端正な大哲学者が子ども時代の遊びを思い出しながら、時間の本質を説いていく——このところが何とも言えぬ味わいがある。ほほ笑ましい。

#### 時間の空間化

大哲学者の子ども時代——というようにことを想像してみること面白いが、右の砂糖の溶解していくのを感じつつ見つめているというような体験は、だれにでもあることだろう。

さらに面白いのは、時間という目に見えぬものを説明するのにはそういう具体例がどうしても必要で、具体例はしばしば時間の空間化という形をとらざるをえないということである。

私たちは、「時間」と「空間」を二つに分けて考えるのに慣れているけれども、実は時間と空間は別々のものではなさそうなのである。だって、日常、だれでも時間を空間にひきつけて、やっと時間を生きた形で体験しているのではないか。「時間に追われて」、「時が流れ」、「時をさかのぼって」というようなぐあいに。

すなおに考えてみると、時間の観念は空間の観念よりも遅れて発生する。経験的にもそうである。また論理的にもそうである。

時間と空間は厳正に分けられない。なかには、これらをキッチンと分けて、生マジメにそれぞれの純粹なカタチを取り出そうとして努力する人もいる。時間のエッセンスは何だろうとか、空間のエッセンスは何だろうというようなぐあいに。エキスを蒸溜する努力に近い試みである。

ところが、反対に、時間を空間のイメージに置き換えたり、空間を時間のイメージに置き換えたりする、おおよかな試みもあとをたたない。むしろ、こちらの方が時

間のゆたかな姿をより具体的に明らかにしよう。前の試みをエキスの蒸溜にたとえてみたから、ここで後者の場合を何かにたとえてみると、時間に身を委ねる試みとでもいうべきか。

#### 直線のイメージ

現代の人間は時間を直線で表象するのがふつうのようである。時間が過去から未来へと向かっている。そして、過去は私たちのうしろにあり、未来は先方にある——というように。前後関係なのである。

もしも反対に、過去が私たちの前にあり、未来がうしろにある、というように感じている人がいたとすると、それは異常なことである。

現代人は、時間をまず前後関係でとらえているのである。

以上は一般論である。ところで——

古い時代の時間の観念やら、子どものもっている時間の観念などを照合していくと、時間は昼と夜、夏と冬、

若さと老い、というようなあいだを行ったり来たりしている。

### 異質な時間

昼と夜は本来はまったく別の時間だった。昼と夜とをひとまとまりにして「一日」と呼ぶのは比較的新しい習慣である。

昼は明るく、夜は暗かった。そういう異質の時間が代わるがわる交替する。昼の生活と夜の生活とのあいだにはまったく異なる役割があった。

その交替の境い目が問題だった。つまり、異質な時間の境い目だから、すらすらと移行するわけにはいかない。というわけで、その境い目は実にあいまいな、不気味なものだった。「昼」とも呼べぬ。「夜」とも呼べぬ。

たがいに正体が分かり合えぬ、不明な場面だった。

「たそがれ」とは、「誰ぞ彼」から来ているのではないか、とは民俗学者の柳田国男の論じたところである。人間がたがいに相手の顔が理解できぬ時間。妖怪が出現す

る時間という、あいまいで、不気味な感じ方がこの表現のなかに息づいている。

子どもの生活時間には昼と夜の交替が異質な時間として体験されている徴しるしが見える。起きている時間と寝る時間という全然別の時間があり、境目はやはりあいまいで、不分明である。「睡魔が襲ってくる」。「寝つきがよい」「寝ざめがよい」「寝賢ねざとしい」。「寝きたない」。「寝ざわ」「起きざわ」。「寝むつかしい」。何とにぎやかなことか。

### 流れる時

時間がいちばん何にたとえられているかを調べる。川である。時は「流れる」という感じを理解するには川の表象がいちばんふさわしいようである。

これにもいろいろな「川」がある。

昼と夜という小さな時間の交替などを無視して悠々と流れる大河にたとえる形而上学的時間は、古くはヘラクレイトスや孔子などにも見えるところである。かと思う

と、川の泡に目を向ける鴨長明のような人もいた。泡を「うたかた」と読ませるのも、ちょっとした心づかいで、孔子やヘラクレイトスの交響曲のような発想にくらべると、演歌風だ。もっとも、これらはいずれも相対的なものである。孔子やヘラクレイトスの「河」をワルツ風に作曲できるかも知れないし、鴨長明の「うたかた」を「あぶく」ぐらいに表象し、童謡に仕立てあげることだって可能である。

せせらぎ、小川、泉、何々川、河、滝、湖、というように、「川」の変貌のなかで「流れる」の表象も変わる。しかし、共通しているのは、「流れる」に、ある運動性が含まれていること、ある方向へ流れていること、切れていないこと、戻ることができないこと、の四つである。

「流れる」のなかにはこんなにも根本的な意味が含まれているのである。

## 流体

容器に盛られた水、一方から他方へ流れていく砂。これらは流体である。子どもにとって、身近な遊びの仲間である。この遊び仲間、あの「川」の表象をもっと身近なところにもたらず手段だった。

ポタリ、ポタリと落ちる雨だれ。しずく。

これらが子どもの関心をひきつけるとすれば、そこには少くとも四つの要因があるからということになる。

すなわち、運動性、方向性、連続性、不可逆性。

雨だれ。しずくが形づくられていくのは、スローモーションで見えていくようなもので、運動の分解に似ている。あるていど大きくなると、水滴は落下する。その瞬間、その水滴のふくらみは形を変えて落ちていく。

時間の観念は、こういういとなみやできごとの集積なのであろう。砂場で作った山の形や町の形が、一夜明けてみると、すっかり変わって残骸になっていたり、廃墟になっていたりする。雨でも降ろうものなら、園の庭にある砂場は廃墟さえも残さずに激変する。

## 上下

時間の根元的なイメージには上下の表象もある。わかりやすくいえば「伸びる」などがその典型である。「大きくなる」などもこれに含まれよう。木ならば「伸びる」にせよ「大きくなる」にせよ上方へ向かっていく。根は反対に下方へ下方へと「伸びて」いくはずであるが、これには横のイメージもある。

「大きくなる」とは、背丈、体重、胸囲、足、その他もろもろの部分が変わっていくことを示している。ここにも暗黙のうちに運動性や連続性、それに不可逆性が含まれているわけである。

昼と夜という異質の時間の交替、その境い目の不分明な両義的な時間などくらべると、時間の上下のイメージは、過去、現在、未来という連続的な時間のイメージとよく似ている。

のみならず、上下の時間イメージは、下から上へと価値の上下をも示すように変化している。上位、上方、いずれも下位や下方よりもネウチがあると見なされてい

る。

「川」ならば、上方から下方へと流れるはずであった。ところが、いまや反対に、下から上へと「登る」のである。

体位の向上、成績の上昇、地位の上昇。

「川」とくらべたら大きな変化である。

## いじる

時の彼方に消え去りそうなことばに「いじる」ということばがある。「土いじり」などという形で復活してくるきざしもないではないが、手でもて遊ぶこと、こねまわすことである。粘土いじり、砂いじりという表現もある。

こういうことからわかるように、「いじる」というのは何よりも手の対象であるというところに特徴がある。出来不出来よりも、手の感触を楽しむことがいちばん重視されている。時間を手につかむことでもある。

「川」などで表象されていた時間が上下の時間イメージ

に変わり、下から上へと昇ること（昇進、昇任、昇給等）が支配的になったのは産業社会の成立と密接に関係している。余分な説明は省略して、端的に「出勤時間」「勤務時間」「時間給」「休憩時間」「勤務中」等があたりまえになったのを思い出すだけでよい。息詰まるような時間厳守からのがれるための「土いじり」などが見られるようになった。時間はコマ切れになり、「お忙しいでしょうね」があいさつ代わりになる。「お暇ですか」などと訊ねると失礼に当たるといふような社会である。

こんな社会のなかでは「いじる」ということも十分にできかねるようで、悠々と「土いじり」をすることができず、苛々、せかせかと「土いじり」をして、さっさとおしまいにするというようなことも起こりかねない。

### 小さな歴史的時間

どんなにうまくできたとしても、「いじり」にとつては偶然的である。子どもがつくった作品もいずれは時の流れのなかで色あせたり、こわれたりしていく。そして

跡形もなくなってしまおう。

しかし、ふしぎなことに、その経過は、あの「いじり」の対極にある「鑑賞」としくみが似ているのである。まずそれは、つくったものに対する「距離」の置き方としてあらわれてくる。ある時、自分が、あのようなものをつくったのだという「対象化」である。その作品の対象化と、それを作った「自分」の対象化でもあるからだ。

変なものをつくっていたのだ。そういう異様さ、滑稽さ、おかしさ、テレクささ、なつかしさなどが入り混じった感情が「距離」をつくり出す。

「まだとっておきたい」「もう捨ててしまいたい」の間で揺れる感情。

時間という主人公が幼なかつた自分のいとなみを浮き立たせて見せる。それは幼なかつた頃の写真を見せられたとき浮かぶ感情に近い。

あの頃から見たら「自分」の時間的視野も広がってきただ。そういう別の感慨も湧いてくる。

つまり、まず昔の作品がそこにある。それがつぎに昔の「自分」を物語り出す。そしてさらに「昔の自分」と「今の自分」がつながってくる。その「つながり」は一直線ではない。ねじれ、くびれ、いびつである。その痕跡を「いじる」こと、そこから小さな歴史的時間が生まれてくる。

#### 不在のものの現前

歴史的な時間は、どんなに素朴なものであっても、いま、ここにはないものごとを現にあるようにつくり出すバネになる。

幼ない頃の「いじり」の跡がどんなに変なものに見えても、一面的な評価で終わることはない。その作品がおかしげな、あやしげな出来ばえであればあるほど、いまにおける評価はより多面的になるであろう。

かつて、その作品を自分がつくった。自分が主人公だった。それと同じように、こんどはその作品が「自分」に向かって何かを語りかけてくる。そのように感じとれ

るからである。

作品は、きっかけを与えるにすぎない。

何があらわれるのか。

『失なわれた時を求めて』という大部の作品を残したマルセル・ブルーストは、その作品を、ケーキを一さじ口にした時思い出した昔の光景から書きはじめている。ありうることである。一口のケーキはきっかけを与えたにすぎない。本来、それは何も思い出させなくてもよいのである。別の思い出を呼び起こしてもよいのである。そういうものもろの可能性のなかからある風景が浮かんでくる。

面白いのは、思い出される風景が、上下の時間のイメージではないということである。

「川」のイメージでもない。さらにその先に異質な時の交替としてあった昼と夜、しかも昼から夜への変転の境い目の時であった。

ベッドに入った。けれども眠れない。そんな時にやってきてくれた母の思い出がまっ先に書かれている。これ



は偶然だろうか。

### 縮少模型

昔の「自分」の作品がそこにある。「距離」が充分にとりきれない場合、「これはわたしのだ」といって、所有を主張するだけで終わるだろう。その作品はモノとして扱われたのである。だが、少しでも「距離」を取れるようになると、そのモノは単なるモノではなくなる。

意味を発信しはじめる。

「この作品」が「昔の自分」を語りはじめ、さらにその意味を読み取るいまの「自分」へと動いていく。

してみると「この作品」は、縮少模型のように「自分」の手のうちで「いじる」ことができる。あの頃の自分、いまの自分、あの頃の人びと、あの頃のできごと、いまの自分、いまのできごと。こういう間を往ったり戻ったりする話題の提供者が「この作品」にはかならない。

時として、充分に「距離」がとれぬ場合、子どもは苛

立つ。「距離」が全然とれないならば、結論は簡単である。が、「距離」は若干とれるが、表象の力が充分でない場合、表象したくても、何をどう表現していいのかわからぬ。その「自分」が情ないので苛立つ。

### 子守歌の形而上学

子守奉公のつらさをうたった子守歌もある。が、ここでは子どもを愛の世界に誘う子守歌の方に目を向けよう。

時間という観点から見るとき、この種の子守歌は、いちばん古層にある時間のパターンを根底にもっている。昼と夜という異質の時間の交替、さらに異様な境い目。その境い目。その境い目の不気味さを子守歌は手なずけてしまうのである。古い古い時代の呪術や祈りに似た構造により手なずけてしまう。歌詞の出来ばえよりもメロディが、メロディよりも歌いぶりが物をいう。

産業社会が高度に発達して「勤務時間」も一樣ではなくなってきた。忙し過ぎる反面、余裕が出て、それを

どうやっていいかわからぬというような現象も出てきている。夜と昼の境目もあやしくなつて、二十四時間営業の店舗も増えつつある。ニューミュージックの多くは、子守歌に似た構造をもちはじめた。

小さなカプセルのような部屋でそつと聴く音楽は、行進曲でもなければ交響曲でもないだろう。それはつぶやきに似ているし、「いじり」にも似ているように思える。

それにしても川の歌が多い。実に多い。読み取り方によつては、あらゆる音楽が「川」のイメージをもとにつくられているのではないかと錯覚されるほどである。

でも、それらであっても、ストレートに川をうたつてはいない。かならず「川」によつて別の何ものかを表現している。何ものかといわれものをつぶさに「いじつて」みると、すべてが時間の形に見えてくる。その時間の形は、いろいろな形が組み合わさつていて、純粹なものをつだけ抽出しようとしても無理であること、むしろ、多様さをそのまま味わう方が実が多いことを教え

てくれるように思える。

子どもはこれらの時間とともに生きている。まさに「生きられたる時」の権化のように。

(名古屋大学)